

僕は、ウトウトとしながら、昔のことを思い出していた。

去年の秋、学校から団体で、中学三年全員で、京都岡崎の美術館へ美術展の鑑賞見学に行った時だ。あの時は、たまたま、あの双子の行っている女子校も美術館の見学する日だった様だ。僕が、薄暗い静かな部屋で、でっかい油絵を一人で見ていると、茶色の制服を来た女生徒が数名入って来た。右を向くと、その子が僕の横に立って、僕を見ていた。なつかしい気持ちで、僕もその子も笑みを浮かべた。昔のあどけない女の子でなく、もう立派な娘さんと言う感じだった。そばで、その子の友達が、僕が誰なのかを、その子に尋ねている様子で、小学校の時の同級生とでも、答えたのだろう、まわりの女生徒は、納得した様な表情でうなずいて、興味深々で、僕の方を見た。鑑賞中は皆、無言で、静かに巡回しながら、彫刻や絵画の作品を見るので、僕は無言だった。その子にも、ほとんど喋らなかつたが、気が合ったのか、なつかしい気持ちで一杯で、一緒に二人で、無言で足の向くまま、一時間程、見てまわった。そして、時間が来て、そのまま、無言で別れた。僕が手をあげてバイバイの合図をすると、その子は軽くお辞儀して、行ってしまった。あれは、本当に自然だった。僕はすなおに振る舞えた。

僕は、いつの間にか、眠りこけていた。
再び、目が覚めると十二時で、下へ降りると、皆、寝ていた。卵を三つ、ゆでて、みぬきにして、梅干しを出して、一人でめしをまた食べ、腹がふくれると、また、眠くなった。再び、床に入り、化学の勉強も、どこへやらで、寝てしまった。ああ、十一日は苦しいだろうなあ。